



見附市立見附小学校 学校だより

みしよ

No. 319

令和4年3月3日（木）発行

〒954-0052

見附市学校町1丁目3番89号

Tel 0258 (62) 0141

<http://www.mitsuke-ngt.ed.jp/~misho/>

六年生を送る会

松井 謙太

昨日2日、六年生を送る会が行われました。見ていて心の奥の方が温かく穏やかな気持ちになる素敵な六送会でした。会の趣旨をよく考え、計画、運営をしてくれた5年生。いよいよ自分たちの出番だと、これまで張り切って準備をしていた姿も思い出されました。六送会本番も頼もしく、これからの見小をリードする最高学年にふさわしい姿でした。6年生からのバトンをしっかり引き継いだものと思います。また、ダンスや思い出発表などで会場を沸かせてくれた在校生の皆さんの活躍も印象的でした。こちらも趣旨がよく理解されていて、「何のために」しているのかを一人一人がよく理解し、いきいきと表現していて見応えがありました。さて、6年生の登校残日数も数えるほどになりました。6年生にしてみると、頭では分かっていた卒業が、六送会を通じて一段とリアルに感じられたものと思います。途方もなく長いように思えた小学校生活も、1日1日の成長の積み重ねです。卒業、そして中学進学に向け、1日1日を大切に作る春にしてもらいたいと思います。(写真 6年生)

虹色にかがやく97人の最高の笑顔とやさしさをありがとう！（在校生）



楽しかった6年間今までありがとう！（6年生）

全校児童が一堂に会して、心ひとつに実施したいと考えていた六送会でしたが、感染症対策として、今年度も、体育館の入場者数を制限せざるを得なくなり、会場の体育館と各教室でのリモート参加とのハイブリッド型で実施しました。会の持ち方や発表内容の修正がいくつか出てきて、指導する教職員や児童は、その対応に苦労したところがありました。しかし、その厳しい条件下でできることを精一杯やり、とてもよい会にしてくれたと思います。

卒業式については、例年通りのフル規格で実施する形も捨てきれず、当初は両睨みで準備を進めてきましたが、六送会同様にハイブリッド型で行うこととしました。 昨年同様、体育館には6年生と若干名の在校生代表、体育館二階ギャラリーに5年生、低中学年は教室のモニターを通じて参加する形になる見込みです。

見小はどんな学校？

先日、ある方から、あなたが校長をしている見附小学校はどんな学校なのですか、と尋ねられました。その方は、学校教育の経験豊かな人でしたので、校地校舎、沿革、立地条件などを聞いているのではなく、見附小学校の教育活動にはどんな特色があり、そこでどんな子どもが育っているのですか、校長としての現状の受け止めに聞きたいということなのだとすぐに分かりました。

十数年前に私が教頭として勤務していた頃の見附小学校でしたら、深く考えることもなく「お花と読書の学校です」と即答していたと思います。物言わない草花を育てる活動を通して、いのちについて考えたり、身近な環境を潤いのあるものに整える喜びを感じ取ったりすることができます。また、読書を通じて、想像力を上げたり、自分の心の中でもう一人の自分と対話しながら、思考力を高めたりすることが期待できます。見小っ子は、この活動をするのだということが、大人にも子どもにもはっきりとしていました。

昨年度久しぶりに校長として着任して、よくなったなと思うところがいくつもありました。子どもたちの生活ぶりは、相変わずのきまりよさに加え、挨拶がよくなっていました。また、教職員が児童の人間関係に目を配り、保護者と連携して対応している様子や、児童の困り感に寄り添い支援する様子はよりよくなっていると思いました。通常学級と特別支援学級の交流も増え、それぞれの担任同士の情報交換も一段と進んでいました。（4頁に続く）

しかし、一方で、この活動をとにかく推進するのだという旗頭となるものが、はっきりしていないとも感じました。それでも校長として、何か特徴的な教育活動を立ち上げなくては、と急ぐ気持ちには少しもありませんでした。ウイルス禍の中過ごすこの期間、体力低下を防ぐために歩く活動を奨励するなどしていました。そして、学校に寄せてもらう信頼と安心の構築や、児童に対しては「好き好きパワー(学校が好き、友達が好き、先生が好き、そして自分が好き)」がいっぱいになることを第一に願って歩んできました。殊更何かをするというよりも、ウイルス禍が収まるまではできる範囲のことをし、結果として好き好きパワーが貯まればよいと考えました。

教職員には年度初めにこんな話をします。「皆さんは、何のために見附小学校に勤めているのでしょうか。それは、見附小の付加価値を高めるためにほかなりません。付加価値とは何か。学力や体力の数値などが上がることもあるでしょうが、私は、子どもたちの、この学校に通ってよかったという声が大きくなることだと思います。保護者の皆さんならば、自分の家の子をこの学校に通わせてよかったということなのだと思います。それが山の頂きだと考えて、皆さんは一年間登っていくのです。クラスによってルートは自由です。ウイルス禍の中、やりたい教育活動にはかなりの制限がかかるでしょうが、休み休み行ってもいいのです。しかし、後になってから、本当はこういうこともできたのだけれどしませんでした、などとは決して言わないでほしい。熱意をもって臨んでほしい。……」

しかし、今日、ウイルス禍が完全に収束するのが果たしていつになるのか、益々見当がつかなくなっているのが実情です。医学研究者の中には、収束まであと4年はかかるという方々もいます。可能な範囲で次を見据えて新たな一歩を踏み出していくことを考えなくてはなりません。私は、この見附小学校の「次」のことを考える場として、「令和5年の創立150周年に向けた取組」が位置づくと考えています。

創立150周年。こんな機会はそうそうありません。子どもたちを育てるチャンスにしなければ、そして、学校、教育について改めて考える機会にしなければ実に勿体ないことです。「何のために」する周年事業なのかを、児童、保護者、地域と共有し、本気で考える機会にできないものかと考えます。

- ・見小とは何なのか。見小っ子とは何なのか。
- ・周年事業をなぜするのか。周年事業を通じて見小っ子にどう育ててもらいたいのか。
- ・周年事業を通じて地域と見小がどうなっていきたいのか。

そして、子どもたちが気づき、学ぶ機会にしていきたい。

- ・見小でどんなことがあったのか。どんな願いがあったのか。そして今は。
- ・卒業生はどんな思い出があるのか。卒業生はどんな活躍をしているのか。
- ・こんな人になりたい。こんな見小になりたい。こんな見附にしたい。……



上辺だけに終わらず「伝統」や「誇り」の中身についてふれさせたいものです。そうした学びの中から、見附小学校の教育活動の旗頭としていく活動が見えてくるのではないかと考えます。校長や誰かが、こういう活動をしましょう、といて下ろしてくるのは簡単です。しかし、当事者が自分事として見小を捉え、主体的に活動していくことを大切にしたい。そのためには、熟議が必要です。

「熟議」とは、多くの当事者による「熟慮」と「討議」を重ねながら策を形成していくことです。

- ①多くの当事者(保護者、教員、地域住民、児童等)が集まって、
- ②課題(これからの見小、見小っ子)について学習・熟慮し、討議をすることにより、
- ③互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、
- ④解決策が洗練され、
- ⑤個々人が納得して自分の役割を果たすようになる、というプロセスのことを言います。



保護者懇談会で、家庭での過ごし方など情報交換をしたり、気になるところについて話し合ったりすることがこれまでもあったと思います。そのあたりからスタートすることで充分だと思います。

来年度は、新しい愛育会執行部を中心に150周年実行委員会が立ち上がります。学校としては、令和4年度から意図的に児童を育て高め、150周年となる令和5年度はその成果発表、表現の場としたいと考えています。

また、これまでもお知らせしてきましたように、先行して取り組んできた伝統教室整備事業があります。最近では、学校の歩みについて関係者から語り部となってもらい、それを映像資料で残す取り組みも形になってきました。

そして、見小を知り、見附を知り、そして自分を知ることにつながる教育活動の工夫も必要になってくるものと思います。以下、具体的に考えられるものを挙げてみました。

- 教材開発と授業実践の蓄積。○愛校心、郷土愛を育てる道徳教育。○学年別ふるさと遠足の継続・発展。
 - お話を聞いて当時の様子を共同製作で描く、修学旅行の移り変わりを調べるなど、関心に応じた活動。
 - 年表を学校の沿革と世の中の動きと重ねて書いてみる。○SDGsなど今日的な課題について関連して学ぶ。
 - ICTを活用した学習のまとめと発信。○総合学習「わたしたちの学校」の単元化。
 - 研究発表会(令和4年度中越社会科教育研究会見附大会)との関連。○その他
- 保護者、地域の皆様には引き続き御理解御協力を宜しくお願いいたします。